

梅雨時の湿気と住まいの工夫

濱 恵介

6 月は旧暦の五月（皐月）に当たる。サツキ晴れとは、五月雨（さみだれ）の降る季節の晴れ間を意味する。英国では「ジューンブライド」という表現があるように爽やかな月だが、わが国では梅雨が始まり、湿気が気になる頃だ。

この季節、湿気は住まいの敵のように見られる。カビ・結露・ジメジメ感など良いイメージがない。カビは気温 15 以上、相対湿度 70% 以上で元気になるから、条件が合う梅雨時は特に工夫が必要だ。

近年はエアコン等で除湿できると言っても、機械力に頼らない湿気対策があつてこそ、梅雨時を快適に過ごせる。

まず、窓の開閉が基本。雨が降る日の風通しは水分を室内に取り込むことになる。窓を開け放つのは、晴れ又は曇りの日に限る。晴れても雨上がりの外の湿度は非常に高い。

次に、室内でなるべく水蒸気を出さないこと。室内での洗濯物干し、植物への水やり、浴室・台所の換気忘れ等が原因となる。

一旦室内の空気に取り込まれた水分は、色々な素材が吸収して均衡状態になるが、それらには布団や衣類も含まれる。そこで内装材の役割が問われる。

本来の日本家屋は素地のままの木材、土壁、畳など湿気を

吸って乾燥時に放出する素材が豊富にあった。雨の時でも室内は意外とカラッとしていたものだ。しかし、近年の家に一般的なビニールクロス貼りの壁や塗装されたフローリング等には、その効果が全くない。

わが家のリビングの一面は吸放湿性の高い珪藻土塗り壁で、木部も素地のままとした = 写真。



また、この上部は温室のような吹き抜けとなっており、建具で区画され独立した換気が確保できるので、洗濯物も干せる。

もし、ご自宅にリフォームや新築の計画があれば、内装仕上げを吸放湿性に富む材料にすることをオススメする。

また、居室に接し建具で区画された半屋外の空間「付設温室」は如何か。英語ではコンサーバトリーと言ひ、原義は植物保管場所。水やりができ、洗濯物も干せる。冬の晴れた日は暖かい陽だまりに、夜は緩衝空間となり、居室を暖かく保つエコ空間だ。